

徳川家は各地の大坂方関係者を厳しく探索した。そのため、善方氏と別れた名城家の先祖は、八の口の地に隠住したという。武士を捨て、本名も捨て、一切を捨て百姓になりきつて、子孫にも本名は伝えなかつた。そのために五月節句には、旗差物の織は最近まで一切立てなかつた。のちに天下の名城大阪城を偲び、「名城」と名乗るようになつた。

大正の火災によつて炎上し、多くの家宝を失い証拠となるものがなくなつてしまつた。奥座敷の武具類が燃えた時の青い炎は、不気味だつたと今に伝えている。

八の口の地は名城一族三軒だつたが、今は多くの家が集まり一つの集落となつてゐる。

(話者 江連 栄)

水戸藩士となつた鈴木家の先祖

『滝』

寛永年間のころ、水戸の領主松平頼房公が滝村の山で鷹刈をやつた。その時、大きなオオカミが出て村人たちは思案にくれていたといふ。すると、水戸藩が召しかかえていた大阪の残党で大隈帶刀なる侍が、「それではおれがたいじしてやろう」ということになり、村人たちが人喰坂と呼んで恐れてだれも近かずかなかつた坂に通りかかつた。

すると、何十匹きといふオオカミが出て来て、大隈帶刀にとびかかり、大隈はあまりのおそろしさにたちのいてしまつた。